
白く輝く帆の下で　　－北の州長の奮闘記－

岡屋いまき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白く輝く帆の下で　－北の州長の奮闘記－

【Zコード】

Z6494X

【作者名】

岡屋いまき

【あらすじ】

平和な日々を重ねていたクロワサント島にある日、北の大陸口ウノームスからの使者一行がやって来た。

ところがその一行は流行病に侵されており、島にも病の猛威が広がって、島民の八割近くが亡くなってしまう。

北の州長の息子の僕は復興途中に亡くなった父の代わりとして、遠縁の人達のお飾り州長に祭り上げられ……。

その日。（前書き）

記載。

きい様から「あとはま～か～せ～た～（笑）」と、ぽ～んと飛んできた設定・話の流れをそのまま使用しているので、合作に近いです。

というか、合作にしよう。と声を掛けたのですが、個人名義でのK。と言われてしましました……。

不定期更新ですが、楽しんでもらえると一人とも喜びます。

その日。

その日、僕は大急ぎで港へ向かっていた。

「でかいんだつて？」

「おう！ 北の大陸ロウノームスから来たらしいぞ！」

「正式な使者一行だつて聞いた！」

「おー————！」

走つて向かう途中、あちこちから出て来る顔見知りや友人達と合流した。

目的はみんな一緒、話にだけは聞いていた北の大陸ロウノームスから來た大きな船を見に行くのだ。

父である州長のところへ知らせに來た港の管理者によれば、その船にはロウノームスからの正式な使者一行が乗つているらしい。

「エイブ。何が起きるか分からぬから、お前は家にいなさい」と父は言ったが、そんな言いつけなんて聞けるはずがない。

見つからぬように、父が港へ向かつた後、少し間を置いて、僕も家を出た。

だいたい父は過保護過ぎる。

母が数年前に高齢出産に挑み、弟か妹と共に亡くなってしまった時から特に。

それから父一人子一人でやって来ている。

父の気持ちも分からぬでもないが、来年11歳になれば、僕も青年の家で完全に集団生活に入るのだ。

そろそろ子離れしてほしいと僕は常々思つてゐるが、州長館である家と青年の家が隣に建つてゐる事を考へると道は遠そうだつた。

港には既にたくさんの人人が集まつていた。

その間を縫つて、僕は何とか口ウノームスの船が見え、なおかつギリギリ話が聞こえる位置まで進んだ。

ただし父に見つかつて、後からお小言を食らいたくなかったので、最前列には出ない。

「大きいねえ」

「おう……」

ロウノームスの船はクロワサントの帆船とはまるで違つていた。まず、大きさ。

そして船体の側面の両舷から、数多くの太い棒……櫂が突き出てゐる。

あの櫂をロウノームスでは奴隸と呼ばれてゐる人達が漕ぎ、船が進むという事を、僕も話でだけだが知つてゐた。

僕が住んでゐる州は、クロワサント島の最北部にあたる。北の大陸ロウノームスに一番近く、他の州よりも大陸の情報が多く入つてくる。

僕の父がくじ運の悪さから州長となり、州長の住む村＝州都には、ロウノームスから訪れる商人がますます増えた。

ちなみに父よりもくじ運の悪い島長は、ひみつひみつ脈を越えた南の州の麓付近に住んでいる。

ロウノームスからの商人にすれば、直接船で乗り付けられる州の方が便利に違いない。

だが正式な使者ともなれば、島長の住む島都へ行つてほしい。とても派手な使者及び随行員一行に、父はそり抜けていく。

それを聞いた使者は、突然に話を変えて来た。

「話はよく分かつた。時に州長殿、この村に医師はいるか？ 実は船の櫂漕ぎ奴隸達の多くが病に罹つていて、今無理をすると帰りの漕ぎ手まで失い兼ねない。

島都へ行つている間、病を診て頂きたいのだが」

「医師はおりますが、一体どのような病でしょう？」

「そう父が尋ねたのに、せっかちなのか使者から詳しい説明は全くもらえなかつた。」

「診てもらえれば分かる。我々は早速島都へ向かわねば……」

「案内をお願いしたいのだが」

「もちろん礼はきちんとする」

「行ける所まで船で進み、途中からは馬車で進む事になりますが、宜しいですか？」

「かまわん。宜しくお願ひする」

正式な使者に行く先々で騒動を起こされては適わないし、万が一遭難なんて事になりでもしたら田も当たられない。

父は慌てて、帆船を準備させ、島都までの案内人を頼んだ。

休憩も一泊もなしに使者は島都へ出発したが、使者達は威張つている感じがするし、接待せずに済んで良かつたと思つ。

ノウロームスの使者と随行員を見送った後、父は入れ違つようやつて來た医師達と一緒に、船の中へ入つていった。

が、あつという間に出て来て、口々に叫び出した。

「みんな！ 村中の医者を呼んできてくれッ！」

「それから何か消化に良さそうな食い物ツツ

「150人分頼むッ！ 症状が重い奴はどこかに寝かせないと……

ツ

「「」から逃げ出さないようにだろうが、3人一組で足を鎖で繋がれて、明らかに全員栄養失調だ。

これじゃあ治るのも治らん」

父は船から降りると、州長館へ向かった。

近くの村に医師の派遣を依頼する手紙を書くのだろう。

最後まで父に見咎められずに済んだと思う間もなく、僕も心当たるの方へ走り出した。

ノウロームスの櫂漕ぎ奴隸達が何の病なのか、どの医者も答えを出せなかつた。

対処療法で船から清潔な屋内へ身柄を移して隔離し、熱をましや鎮痛剤を飲ませた。

最初は栄養失調等の長い間の奴隸生活がたたつた病だと思われていたが、しばらく経つとそれだけではないのが分かつた。

ロウノームスからやつて来た病は感染力が強く、しかも致死率が異常に高かつたのだ。

そうと分かつた時には手遅れだつた。

病は僕の住む北の州に留まらず、最終的にクロワサント島全てに広がつていつた。

「州長！ 家族がやられた！ 貯蔵してある薬草を分けてくれ……っ！」

毎日こんな風に村人達が州長である父を訪れた。

ばたばた人が倒れ、医師もいなくなり、感染は体力のない老人や子供から次々と命を奪つていく。

もうすぐ冬になるといつのに、貯蔵していた薬草は底を尽いた。

感染を防ぐ為、他州は州境を閉ざしており、無理に越境する者が出来た事から、関係も悪化し、助けは期待出来ない。

他の州もきっと助けるどころではなく、それぞれ対応に追わされている事だろう。

「……薬草はもうない。とにかく体を冷やして熱を下げる」

そう言つて、父は村人達を追い帰した。

その頃、僕もまた病に感染していたのだ。

「……お父さん、これ。さつき、もうない……」って

「……。いいから、飲め。飲んで元気になるんだ、エイブ」

僕の為に父が嘘をついてまで手元に残した最後の薬草湯を、僕は
飲んだ……。

その日。（後書き）

くじ引き

クロワサンント島では1年に1回、コメ（もどき。以降コメで統一）の収穫祭の時にくじ引きが行われている。

くじ引きは基本的に村単位で、全ての村人が役割に付くようになつていて、

村長・相談役などから、田園への水路整備係まで、20歳以上の全ての人気がくじを引き、土地も同様に割り振られる。

くじ引きは、個人的な交換なら可能だ。

州長は10年に一度、その年村長になつている全員でくじを引く。

村長は1年で交代出来るが、州長は10年間も交代出来ない。

州長を引いてしまった人は、村長も10年間兼任で勤めなくてはならない。

そして島の代表＝島長も、州長のくじ引きの5年後、現島長の州を抜かした州長9人でくじを引き、大当たりを引いた州長が島長となる。

つまり10年間、村長兼・州長兼・島長であり、島長のくじを引いたくじ引きに非常に弱い村長の村は、10年間島都と呼ばれる。

州長になつた

父が死んだ。
過労死だった。

息子を助ける為とはいえ嘘をつき、最後の薬草を隠匿した、という後ろめたさの為か、父はその埋め合わせをする如く、身を削つて州の為に働いた。

「お父さん、まだ起きてるの？」
「もう少ししたら寝るわ。先に寝ていなさい、エイブ」

「お父さん、ご飯は？」
「さつき済んだよ。エイブは成長期なんだから、ゆっくり食べるんだぞ」

「お父さん、少しは休まないと……」「ああ、そうだな。これが終わったら……」

僕には父が罪悪感から働き詰めにしているのは分かつていた。
だが、その明らかに我が身を顧みない州長振りを心配せずにはいられなかつた。

それなのに何度も同じ様な言葉を繰り返しても、父は州の為に働く続けるのを止めようとはしなかつた。

父が亡くなつて数日も経たないうちに、遠縁の者が僕に御託を並

べ出した。

「亡き州長の遺志を継げるのは一緒に付いて回っていた君しかいな
いよ、エイブ君」
「州都以外から集まつて来ている人達にも一番顔を覚えられている
でしようし、エイブ君が州長を引き継ぐべきだわ」

一体何を言つてゐるんだ、この人達は……。

「僕はまだ十五歳の子供です。州長など僕には無理です」「
とてもではないが、僕は父の様に動く事など出来はしない。」

州都再建に向けて動いてゐる皆だつて、15歳の子供にアレコレ
言われたくないだらうじ、まとめ役などビリじたつて無理だ。

「ちゅうどいい機会です。新たな州長はくじ引きで決めませんか？」

だからクロワサント島のこれまでの制度通りに戻そつと、くじ引
きを持ち出したのだが、遠縁の者は意見を引かず、更に言い募つて
くる。

「今はまだともくじ引きなど出来る状態ではないさ」「
くじ引きをして働く場所が変わつてしまつたら、それこそみんな
混乱して復興が遅くなるじゃないの」

しかしきつと遠縁の者達の心の内は違つのだ。

くじ引きとなれば、遠縁の者達が面倒を見なければ、15歳の僕
は孤児として、青年の家に入る事になる。

そして自分達と関係ない者が州長になれば、遠縁の者達も当然州

長館から出なければならぬ。

それは復興のおこぼれに預かれなくなるという事を意味している。州長館に留まる為に、僕を州長の座に据えたいのだろう。

だといつのに、一見その意見が道理に適っていたのが問題だった。遠縁の者達のそんな内心を知らない、復興仕事のまとめ役として動いている親方達を含む大人達が、その意見に賛成してしまったのだ。

働き過ぎる父が心配で側にいただけなのに、それが返つて仇になるなんて僕は思いもしなかつた。

「僕はくじ引き制度を復活させたいんだけど、どんな風に言えば大人達を説得出来ると思う?」

堪り兼ねて僕は生き残っていた同年齢の幼馴染達に相談した。

てつきり州長を固辞すべく一緒になつて考えてくれると思つていたのだが。

「くじ引きなんて無理だろ」

「無理よ」

「「無理無理」」

と、一刀両断されてしまった。

その上、青年の家に住む皆は、幼馴染を皮切りとして、僕の思惑とは反対にこそつて州長になれと言い募ってきた。

「俺はエイブ以上に青年の家を気に掛けてくれる大人はいないと思

「う

「エイブが出て行つても、遠縁の奴等は理由を付けて、州長館から
出て行かないかも知れないぞ」

「うそ。エイブは辛いだろうけど、州長館に留まつてほしになつ
「小さい子の面倒を見るのはエイブじゃなくつても出来るけど、青
年の家を少しでも守れるのはエイブだけだよね」

未だに16歳になると大人と一緒に復興仕事に駆り出されるので、
15歳は青年の家にいる子供達の中で一番年上だった。
幼馴染達も、年下の子達を守りうと自然と責任感も沸いているの
だろう。

そして最後には、州の最高齢者である、北の賢者おばあちゃんの
鶴の一聲に止めを刺された。

「エイブ。気持ちは分かるけれど、今はくじ引きなんてしている時
期じゃないよ。お前が州長におなり

「おばあちゃんまで……」

僕はがっくりと肩を落とした。

おばあちゃんは賢者として名高く、流行病が拡がる前から世話役
として青年の家に住んでいた。

流行病さえも乗り越えて、足腰田耳と弱つてはいるが、杖さえ持
てば歩ける。

青年の家の女の子達が、おばあちゃんの世話役を交代で受け持つ
ていた。

そんなおばあちゃんの勧めもあり、気は進まないが僕は推される

ままに州長になつた。

ところが、何かあつたら父の指示に従つていれば大丈夫だという北の州の大人達の意識が、僕にとつて大きな問題となつてきた。少しずつだが父の代わりに、遠縁であり同じ州長館に住み、父の補佐していた者達の指示に従えば、北の州の復興は進むという意見が増え、最終的に復興の全権を遠縁の者達が握る事になったのである。

生前の父は遠縁の者達に、青年の家の孤児達の世話も頼んでいた。

しかし、ある時。

僕は青年の家の子供が州長館で食器洗いをしているのを見つけてしまった。

更に、遠縁の者の部屋から掃除道具を持つて出てきたりするのに出くわす事が多くなつた。

「気が付くたびに僕が代わるつとすると、「怒られる」「大丈夫だから」と断られ、遠縁の者に対し怯えてモいる様だ。

「あの子達はあなた方の召使いじゃないんですね

」そう僕が言つても。

「大袈裟だな、エイブ君は

「手が空いていそだだから、ちょっと頼んだだけよ」
そんな風に遠縁の者達はまるで取り合おうとしない。

その上、青年の家に回す分の物資や食料を、遠縁の者は着服しているらしい。

しかもそれは年を追つごとに酷くなっていた。

本来なら11歳から19歳の青年達が共同生活する青年の家は、僕の憧れの存在だ。

今はそんな憧れや羨ましい場所には程遠い。

2・3歳から15歳まで、身寄りのない子供が住み、州長館付属の召使いとして援助を受ける側に回っているのだ。

くじ引き制度復活がまだ早いというなら、せめて青年の家を本来の状態に戻したい。

16歳になつてしまつと、幼馴染達は大人扱いとなり、青年の家から出なくてはならなくなる。

そうなると、今より接点を持ち辛くなるに違いなかつた。

だからあと1年で本来の状態への方向性が付けられる様に……。

幸いというべきか、お飾り州長として、考える時間だけなら僕にはたくさんあつた。

でも、どこから手を付けていけばいいのだろうかと、おばあちゃんに相談を持ち掛ける為に僕は青年の家へ向かつた。

「 そうだねえ……」

おばあちゃんが僕の考えを吟味するように黙り込むと、それを側で聞いていたその日のお世話を受け持つていた幼馴染が力説して来

る。

「まあいい」飯のおかずをもつて一品希望……最低生活脱出……。」

青年の家に回るはずの食糧を僕も遠縁の者達と一緒に口にしているはずで、思わず謝罪が口をつきそうになつた。

でも僕からの謝罪など、幼馴染が望んでいるわけではない。
謝りさえすれば僕はその分気持ちが楽になるだらうが、青年の家の現状は全く変わらないのだ。

建設的な事を考えようとして、耐える。

まず飢えたままでは仕方がない、という事だ。

州の復興と、青年の家を本来の状態に戻すのでは規模が違うが、父も食糧確保から動いていた事を僕は思い出す。

「確かに、前は田んぼや畠を青年の家で独自に持つていたよなあ？」
「うん。今はその場所の収穫物も州都の物になっちゃってるけど……」

「……」

「じゃあ駄目か……」

元は青年の家の田畠だったのだから返してほしいと頼んでも、遠縁の者達が頷いてくれるはずがない。

「山で山菜採りは？　薬草も摘める」

さすがに父の様に、雪山で狩りなど僕には真似出来ないが……。

「それならたまに思うんだけど、どれが食べられるのかがよく分からなくて。

それに小さい子の面倒も見ながらだから、あんまり奥までは行けないだろつし」

黙つて、幼馴染と僕とのやり取りを聞いていたおばあちゃんが口を開く。

「エイブがお探し

「え、探すつて何をですか、おばあちゃん?」

「青年の家も州長館にも植物事典があるじゃうつから、それを探し出すんじやよ。

どれが食べられるか、それとも駄目なのか、覚えるまでそれを持って採りに行くのさ」

「そつか、なるほど」

「それに山や野だけじゃないんだよ。

州都はすぐ近くに海もあるんだからね、砂浜で海藻や貝が採れる。波が高くない日を選んで行けば、小さいお子等が一緒に大丈夫じゃうつ」

「海藻や貝の事典も僕が探すんですね

「そうじや。まずはそこからさ、頑張るんだよ、エイブ

「そう言つて、おばあちゃんはこつと笑つた。

ただお飾りになつてゐるだけではなく、お前にもちやんと出来る事があるんだよ、と僕は言われた様な気がした。

「はい。じゃあ早速探してみます!」「私もこの事をみんなに伝えとくから」「うん、頼んだ!」

僕は駆け出した。

州長になつた。（後書き）

青年の家

クロワサント島の島人は、生まれてから最初の10年は親元で過ごす。

6歳から10歳までは通いで、『青年の家』で田中過ぐす。

11歳から19歳までは、青年の家の集団生活。

青年の家の生活の間に、どんなくじを引いても大丈夫なように、
基本的な職業訓練が行われるのだ。

青年の家は、基本的に村長（州長）の家の横に建てられている。
間に敷居はない。

日常生活（食事洗濯農作業田植えなど）を、子供達それぞれで世
話しあう。

その子供達の先生役＆相談役として、年配になり田植え労働がき
つくなつた老人達があたり、仕事の仕方をビシビシ鍛えた。

中には100歳を超える長老もいて、知恵者として大事にされて
いる。

相談役のくじは老人達に回すのが、くじにおける暗黙の約束にな
つていた。

始動する。

僕がお飾り州長になつた頃から、何とか病の流行は下火になり、州も落ち着きを取り戻し始めた。

州都に集まつて来ている人々が、北の州全体の生き残りならば、9割の住民が亡くなつてゐる事になる。

親や身寄りがいる子供達と、青年の家にいる子供達は、今はそれぞれ住む場所は違つけれど、元は近所に住んでいたりして仲良しだ。

「あ！ バナちゃん、みんなでどこ行くの～？？」

「これから、海へおかずを探りに行くんだよ～！」

「海に、おかず？？」

「海藻とか～、貝とか～、なんだつて！ 一緒に行く？」

「うんっ、行く行く！」

「でもね、大人には内緒だよ～！ 子供だけの秘密なの～！」

「分かつた、秘密だね～！」

そんな風にして秘密の仲間の一員は増えていく。

一緒には出掛けられないが、僕も後から覗きに行って、砂浜でキヤーキヤー騒いでいるのが青年の家の子供達だけではない事に気付いて、嬉しく思つ。

「わあ！ ハイブお兄ちゃんも来た～！」
「頑張ってるね～、バナ！」

「うんっ！ 病気は海から来たけど、海にはちつとも関係なかったんだよ。だってこんなに気持ちいいもんっ」

ロウノームスの船はこの病気はおかしこと氣付いた時点での父の指示により燃やしてしまった。

もし海の生き物にも流行病がつづるなら、一面死骸だらけで腐った臭いがするに違いない。

バナは僕よりも8歳年下、青年の家の女の子だ。

年長者に引っ付いている年齢でもないが、年下に手取り足取り教えられるほど面倒見が良くなっている歳でもない。

青年の家の中での着替えや食事中ならともかく、今は外に出ているのだ。
「飯がかかっているところよつ、同年代の子供と遊んでいたいのだろう。

僕は面倒を見なくてはならない小さい子供を連れた幼馴染を見つけた。

「調子はどう？」

「楽しいよ～。本と一つ一つ照らし合わないといけないのは大変だけど。

それにいっぱい採れそつだから、一日では食べれないかも。赤ちゃん具は採らないで、海に逃がしてねって言つてはいるけど

……

「そつか～。配るわけにもいかないしなあ

「

「大人には内緒なんだよ！　エイブお兄ちゃん！」

話を聞いていたバナに諭され、笑った後すぐ大真面目に頷いた。

「そうだよな、うん。内緒内緒。

……手伝えなくて悪いけど、早速おばあちゃんに相談してみる。

潮が満ちる時間には気を付けて」

「は～い。頑張つてね～、エイブ州長様～」

黄色い声援を向けてくれたのは嬉しいが、州長にしかも様付けまでされて、僕はガックリと肩を落とす。

「……頑張りたくない

」「駄目！」

「……はい」

何が出来る訳ではないが復興の進み具合を見ようと、色々な場所に寄つてから青年の家に僕は帰つた。

おばあちゃんに海で幼馴染が言つていた保存方法について尋ねると。

「干すか、佃煮だねえ。一度茹でてから、塩漬けでもいいよ。そうすると傷み難くなるのさ。

……そうかそうか、海は健やかだつたんだね、有り難や

まず保護者と一緒に住む子達を家まで送り届けてから、青年の家に帰つて来たらしい皆を僕は州長館の窓の内からじつそり見ていた。

その表情は明るい。

砂浜で拾つたり、食べ終わつた貝殻は綺麗に洗い、腕輪や首飾りにしたり、重ねてくつ付けてちょっととした置き物にしたり、食べるだけでなく皆で楽しんだ。

僕が後から聞いた話によると、潮が満ちてくるのを始めに気が付いたのはバナだつたらしい。

始めに言い出したバナに、「もう少し大丈夫じゃない?」と答えているうちに、あれよあれよという間に波が押し寄せて来たのだそうな。

「良く分かつたなあ、バナ。偉いぞ~」「えへへ

照れたバナの頭を僕は撫でた。

日々本を片手に子供達が食材探しに海や里山へと出掛けるのを僕は見送る。

始めは大人には秘密の行動だつたのだが、青年の家の子供達以外も一緒に行つていたので……まあ、少しずつバレた。

「今日はどこに行つてたの?」

「秘密!」

「あら、そこのの~?」

「ここまでは良いとして、

「……お母さん、食べられる貝と食べられない貝があるって、知つてた？」

新たに仕入れた知識を、子供は大人に披露してしまつものだからだ。

保護者達にしても、子供達が団体行動していく方が安心だし、ちゃんと帰りは家まで送り届けてくれるのだからと、黙認した。そのうちに手の空いている大人も一緒に行ったり、自分のところの子供も団体行動に混せてほしいと頼んで来たりし始めた。

その上、これは〇〇、これは駄目、こんな料理が美味しいよ等々、知識を伝えるようになり、食糧調達に向かう子供達の行動範囲はますます広がつていった。

大人達の裏からの協力に支えられながら、青年の家の子供達が食糧調達をするようになつてから、しばらく後。

遠縁の者が探るような目をして、僕に聞いて来た。

「隣の孤児達と何かやつてるんじゃないか、エイブ君？」

「隣の皆は、最近、海や山に遊びに行つてゐみたいですよ」

「エイブ君は行つてないのかい？」

「はい。僕はほとんど付き合えてません。そのうち飽きるんじゃないですか？」

州長館に取られている分の食い扶持を自分達で稼ごうとしているんだ！ と言いたいが、今邪魔をされるのは困る。

僕は苦しい言い訳をして誤魔化した。

遠縁の者達は召使いがいなくなつたら困るとでも思つてゐるに違いない。

でも僕も自分が100%善意から、青年の家を元の状態に戻そうとしている訳じやない。

最後の薬草を私物化した罪悪感から、父が州の復興に文字通り命を懸けたように、その薬草を飲んだ僕は、青年の家を元の状態に戻せば贖罪になると、心のどこかで思つてゐる。

もちろん、くじ引き再開もしかり……。

もし薬草の件がなければ、僕だつて遠縁の者達のよつこ、手に入れた権力を手放すまいと、青年の家の幼馴染達の事など放つておいたかも知れなかつた。

とにかく遠縁の者達に疑われ始めている事を伝えておいつと、僕は青年の家へ向かつた。

すると待つてましたとばかりに、幼馴染達に引っ捕らえられる。

「エイブ！ 小舟の直し方、知つてる？」

「たぶん州から逃げ出す時に使って、射掛けられた小舟だと思つんだけど、浜に打ち上げられてるのよ」

「直すのが分からなかつたら、小舟を作る方法でもいいぞ」

「え、ちょっと待つて……」

戸惑う僕に、幼馴染は更に口々に言ひ出した。

「船があれば、魚釣りに行けるだら」

「貝や海藻を食べ続けても何ともないんだもん。海の魚も食べたい！」

「釣りつて、どうやるんだっけ？」

「糸の先に餌を付けて、んで～？　あと網で獲つたりもしなかったつけ？」

「ちょ、ちょっと……」「……

せ、せめてメモしたい……。

しかし僕の制止など、幼馴染は聞いちゃいなかつた。
ひたすら自分達の言いたい事だけを述べて来る。

「余つたら、魚も干せるらしいよ」

「他に魚の保存方法ってあるのかな～？」

「調べといて！　ハイブ！…！」

様々な言葉に押し潰されそうになつてゐる僕を助けられるのは、
おばあちゃんしかいなかつた。

「こりこり、お前達。ハイブが困つてるじゃあないか。

さすがに私にも分からんのだよ。助けになれなくてすまないね
え、ハイブ

「そんな事ないです。十分助かりました、おばあちゃん

幼馴染達からの猛攻撃を止めてもらえただけで、とは口に出すと
後から怖いので言わなかつたが。

「ええっと……。まあは船から？」

「そうだよ。調べ物が色々あるんだから、今度はちゃんと文字が読める子に手伝ってもらいうんだよ、エイブ。
何もかも全部自分一人で調べなくつちやつて、しょい込む必要はないからね」

「はい、おばあちゃん」

おばあちゃんに言われて、僕は随分気が楽になつたを感じる。

僕にとってのおばあちゃんのような存在が、父にはいたのだろうか？

もしいれば、父は死こまではしなかつたのではないか……。

「ところで、エイブ。 じばらぐの食材も確保出来たし、みんな外で集団行動するのにも慣れてきたから、 隣村まで出掛けで、田んぼと畑を始めようと思つてるの」

「隣村？」

そういえば海や里山に行く前、流行病前に青年の家が持つっていた田畠の事が話題に出たつけど、僕は思い出した。

「そ、弁当持参でな」

「州の生き残りは州都に集まつて来てて、周りの村は放置されて寂れてるだけのはずだし」

「農具とかもそのままだといいんだけど」

「あとは苗種だよね～」「だよな～」

僕なら何とかしてくれるだろうとこう、幼馴染達の期待の籠つた
視線を無視したい。

「ひひひ、お前達っ

「だつて、おばあちゃん……

「だつて、じやないよ」

「はあーい」

「……おばあちゃん、ありがとう」

僕は内心涙した。

始動する。（後書き）

クロワサント島

クロワサント島は太い三日月の船が転覆したような形をしている。島の外周は砂浜では続いてはおらず、所々は切り立つた断崖が続いている為、歩いて巡ると半年近くは掛かるのではないかと言われていた。

島の中央には東西に、雲が垂れ込めるとな頂上が隠れてしまつくらい高い山脈の峰々がいつくも連なり伸びている。

そんな高い山には雪が降る事もたまにあるが、基本クロワサント島の気候は高温多湿で、山脈の南側は特に雨が多くった。

山脈はクロワサント島の南北を隔てる州境となっていた。

更にその南北も、山脈を源流とする川でそれぞれ5個ずつの州に分かれ、クロワサント島は計10の州で成り立っている。

州は、一番左から西南の州、西北の州、南西の州、北西の州、南の州、北の州、南東の州、北東の州、東南の州、東北の州と呼ばれている。

初めての舟。

「みんな～、今日は本を探す手伝いをしてもらえないか～？」

次の日、たまたま雨で外に出れなくて、青年の家で暇を持て余していた年下の子達に僕は声を掛けた。

「舟の本を見つけたら、僕のところに持ってきて欲しいんだ」

「昨日見つけた小舟の修理の本～？」

「そうだよ～」

さすが青年の家。

情報伝達早いなあ。

「どんな本でもいいから、舟が書いてあつたら持つてきて～」

簡単な文字しか読めない小さな子供達にも声を掛けた。
みんな一斉に本棚に殺到し、次から次へと持つてくる。
僕はどうどん本に田を通していった。

一通り田を通して思つたのは、舟に関して全くの初心者である為、
僕らが必要としている舟の修繕や造船に関する専門書
は、ただ字面をなぞつただけでは今一つピンと来ないというものの
だった。

所々に使われている専門用語も意味不明である。

その内容に戸惑つたのは幼馴染達も同様だった。

「うが～つ。分からん～つ」

「なんで舟に油がいるの？」

「う～～～～ん」

みんなで頭を抱えていると、

「さすがに本だけじゃ無理かねえ」

「おばあちゃん」

おばあちゃんとも話し合いの上、やはり一度舟に詳しい人に相談に乗つてもらおうという事になった。

僕らの行動を陰ながら支えてくれているお母さん達に、話を掛け、そこから更に秘密を共有してくれそうで、舟に詳しい人を紹介してもらつた。

偶然にも、バナの幼馴染のお母さんのお父さんだつた。

「久しぶりだ、バナ。元気だつたか？」

「……おじさん誰？」

「お前の父ちゃんの仕事仲間さ。まあ前にあつたのは、お前が生まれた時の時だつたからな。覚えてるわけないよなあ」

「……お父ちゃん？」

「お前の母ちゃんも知つてるぞ。お前は一人によく似ているよ」
懐かしそうにバナの頭を撫でてくる。

話のきっかけに出来ればと思ってバナを連れてきたけれど、娘さんから聞いていた通り、バナの両親は親方に随分と気に入られていたらしい。

「……お疲れのこと、すみません」

もちろん遠縁の者達がいない時間を見計らうのは忘れない。

「子供達の悪巧みの相談に乗つてやつてくれつて言われて何かと思えば、お前かあ、エイブ」

早速、相談に訪れた家で、初つ端僕は笑われた。

「そんな、人聞きが悪いです。他言無用でちょっと……じゃなくて、色々と質問したい事があるだけで」

「それを悪巧みしてゐるつていうのぞ」

変な風に話が伝わつてしまつてゐるのか？

いや、親方のこの表情だと、ただ単にからかわれてゐるか、面白がられているのだろう。

「それで、何を教えてほしいつて？」

「ここが分からんんですけど」

僕は予め持参した本を見せる。

「ああ、これはな……」

基本的に僕達子供に仕事を教えてくれる大人は、人柄がイイ人^{II}復興仕事をする者達をまとめる親方達や、その手伝いをしている人達が多かつた。

だから僕の名前も知つていたのだ。

今回のお願い相手が親方で、顔を何となく知つてゐる程度の面識しかない大人相手じゃない事に、僕は大いにホッとしていた。

「それにしても、どうした、エイブ？ 今北の州に舟などないだろ

うが。なぜ舟について聞いてくる?」

「友達が、難破している舟を見つけたんです。直して使えば、魚釣りに沖に出れるかと」

「海に出るだと?...」

「ええ

「馬鹿な! 病は海から来たんだぞ!」

娘さん以外のすべての家族を流行病で亡くした親方の気持ちは分かる。北の州のほとんどの者が、同じやるせない気持ちを海に対しても抱えているだろ?」

だが、ここで止めるわけにはいかない。

この村は海と共に生きてきた。

海こそ僕らの復興の力、ギなのだ。

「親方、海は変わりありません。北の州の病が終焉したように、海の病も終焉したのでしょう。

変わらず僕たちに豊かな恵みをもたらしてくれています」

「だが。またもし何かあつたら……」

「大丈夫ですよ。前回は病に負けましたが、それは病について何も知らなかつたからです。今は病がどう進むかどんな症状が出るか分かつてあります。早期に

対処を行えます」

「う～む」

どうやら話を聞いてもらえそうだ。

僕は親方に、青年の家が田指す『いじ飯のおかずをもつ一品希望』の話を聞いてもらひた。

さすがの親方も、青年の家の実情は気付いてなかつたらしい。整理されず、つつかえる僕の話を、真剣な顔をして聞き続けてくれた。

今日は朝から舟の修繕である。

最初は青年の家の子供達と親方による口頭のやり取りだったのだが、そのうちに村全体が参加する、雨の日の恒例相談会に広がつた。

最初は難破船集めだつた。

まずは使えそうな木板に付いた貝殻を削り落とすところから始まり、木板の損傷部分の交換・修繕・そして組み直し。

そして帆の作成方法。
それらを紐^{ロープ}で繋ぐ。

木板の縫^さぎ目に、纖維を練り込んだ防水油を詰め込んで隙間を埋める。

浸水防止としても、油は全体に塗つていく。

「この結び方は舟以外でも使えるからな。この際、しつかり覚えてとくんだぞ！」

「はい！」

「指ぬきを忘れるな、自分の手を縫うなよー。」

「わわわ……っ」

「ずっと水が浸かっている部分はどうしても脆くなりやすいが、そのつど修繕していけば何十年も乗れるからなー。」

「おお～ッ！」

操船方法に、網の修繕方法や、竿の手入れ、餌の付け方も一から教わり……。

それらの教えを新たに書き残し、纏める役は僕に押し付けられた。なぜなら。

「もつとキレイに書きなさいよ、読めないでしょっー。」

「誰こいれ書いたの、汚いわね～」

と、女の子達から散々に言われ。

「あいつら、やいやいウルセヒんだよ」

「だから頼むな、エイブ」

「な……っ。僕だって文句言われたくないんだけど……」

やる時はやるし、しっかり口もアイデアも挟む幼馴染達（男）が、文句を言つ幼馴染達（女）を恐れて、字を書く作業を僕に押し付けたのだ。

書き写しが間違いないか、書いてはみたものの、やっぱりここが

分からない等々。

何度も親方の所に聞きにいった。

だが、『「飯のおかずをもう一品希望!』が州都全体にひっそり浸透したのに、まとめ役は僕のまま。

その内、書類作成は僕に押し付け＝州の事務仕事まで僕担当だと、周知定着してしまった。

押し付けられるたびに僕は、

「やつて下さいよ～」

と言うのだが、誰もが、

「任せたぞ～。よつ、纏め上手！」（笑）

と、取り合ってくれない。

仕方なく仲間に、

「お前らズルイ。僕も書類作成以外で動き回りたい～」

と愚痴を零しつつ、それらの仕事をきっちりこなしていった。

州の事務仕事で唯一嬉しい誤算だったのは、書類作成という最終的な〆を僕が行っているので、遠縁の者達がただの書類預かり係になり、実権がほぼなくなつた事だ。

もう復興のおこぼれにはあづかれない流れになつていると、ちゃんと気付いてくれていますか……叔父さん叔母さん……。

初めての舟（後書き）

ある日のハイブ

朝、起床。

昨日終わらせた書類を見直し。

遠縁の者達と朝食を取る。

収集に出かける青年の家の子達と一緒に村まで出かけ、書類を届ける。

州長館に戻つて、出来ていない書類と今日頼まれた書類の作成。「ぐう……。分からん。前回はどうなつてたんだっけ？」

「ゴソゴソゴソゴソ……。

「……読めない」

「お~い、ハイブ、これ頼む~」

「親方いことひど~！ コレ教えてほしいんですけど~！」

「おう。これこれこうこう訳でな。いつなつている
「なるほど~」

「教え貸に、こいつも頼む~」

「また増えた！ しかも……！」

「ぐがあ！ 読めないじやないですかあ！」

「おひ。だから清書をな。」こつは道具と人を借り出す書類だ。「じゃあ、とうとう？」

「おひ！ 始めるか！ 青年の家の奴らに明日の朝、港に来るひがみ
伝えてくれ」

「わかりましたっ！」

打つて変わって、自然と声が弾む。

「頼んだぞー」

去つてこいつとする背中を呼び止めて、せひお願い！
「僕も乗りたいです！」

「手持ちの書類が全部終わつてたらなつ

「親方、ヒドイーっ！」

終わる訳ないじゃないですか～っ！ 次々もつてくれるのは誰ですか～～～！

ちょっと落ち込みながら、おばあちゃんとお風呂飯。

「どうかしたのかい？」

「明日、始動するそいつです

「わうかい。じゃあ今日中に潮の流れや海底の様子を書いてある地
図を探さねばね」

「……ワカリマシタ」

明日、舟に乗れないのは確定です…。

午前中頑張つて、書類をだいぶ片づけたのになあ……。

午後いっぱいかけても見つからない地図に、涙目になつた僕。

「おーい。エイブが捜してるのはこれー?」
幼馴染が薄い大判本を持ってきた。

中を見て、

叫んでしまつたつ！

「借り一つなつ！」

明日親方に渡さねばっ！ と意気込んでいた僕は、ニヤニヤと幼馴染が眺めて来ているのに気付かなかつた……。

抱負。

食糧確保の足掛かりを作った状態で、幼馴染達は次々と16歳になり、青年の家を出て行った。

保護者がいる幼馴染達も同様に、大人達の仕事に交じっていく。予想していた通り、仕事をし始めた事で、どうしても接点が少なくなつたが、幼馴染達は一緒に働いている大人達の現状やこの先どうしていきたいかの意見を集めてくれた。

集めるだけではなく、青年の家やくじ引きの復活についても、尋ねてくれている。

「あれ？ いつもお前等、くじ引き復活は無理って言つてたのに？」

「どういう風の吹き回しかなと、僕が問い合わせるれば。」

「エイブがあんまり何回もくじ引きくじ引きって言つから~」

「そうそう。青年の家の食糧確保が上手くいったし、くじ引きも…と思つわけ」

これまで全然話を聞いちやくなかったが、どうやら僕の粘り勝ちらしい。

「流行病の後にも赤ちゃんは生まれてるもん。このまま病が下火続
きなら、そのうち人が増えて、州都だけじゃ皆を貰えなくなる」

「そしたら隣の村とかに自然と移住する事になるんだろうけど、
その移動先の土地とかが早いもん勝ちじゃ、不公平になるに決まつ

てるよ

「そう考えると、やつぱやうなる前に……くじ引きっ。」
「かなあ……」

「だろ！ くじ引きだよ！」

僕は二ひどばかりにしつかり頷き、力説した。

集まつて来た北の州の人々が州都に収まつてゐるうちに、くじ引き復活を成すべく、僕は幼馴染達とすっかり顔見知りになつた大人達から説得していく事にした。

書類を頼みに来た時に、
「親方。ちょっと相談が……」
そう話を持ち出す。

「おう。なんだ？」

「新しい船を作りたいんですけど、作れそうですか？」

「新しい船があ……」

「ええ。今幼馴染と話してたんですが、村のみんな結構海に出るようになつたそつじやないですか？」

「ああ。そうだなあ」

「そうすると、今ある船じや足りなくなりませんか？」
親方は悩んでいるようだが、置み掛ける。

「うへん。今でさえ不足気味だからなあ」

「でしょう？ だからこの際、新しい船を作つちやうのはどうかな

と

すると親方は少し考え、そして賛成してくれた。
「まあ、みんな舟の修理はお手の物になつたしな。新たな船を作るのも、皆のやる気が起きたうだ」

「ですよねー 計画お願ひしてもいいですか?」

「おう! ただし書類は任せたぞー!」

しかし、それを聞いて僕はガツクリだ。

「えー。たまには自分で書いて下せこよ~」

「わしの字は汚い。お前も読めんつて言つてただろ? が

「せうなんですかどー。たまこは僕も皆と一緒に働きたいです」とも言つてみるが、親方には通用しない。

「しようちゅう混じつてるだろ?」

「そりやあ、書類ばかり見てるのは飽きますもん」

「お前の字が一番きれいなんだ。任せると

「うへー」

そのまま親方は州長室を出よひとするが、実はまだ本題がある。

「あ、親方!」

「うん? どうした?」

「それで、新しい船なんですが、管理をどうしようか悩んでるんで

す

「うん？ 今まで通りわしがやるぞ？」

「ええ。何も言わずに甘えちやおうかなと思つたんです。実は「おい。言つてくれるなあ」

親方は呆れている。

僕も親方に任せてしまつのが、一番楽だらうとは思つられど、やれで進んではいけないのだ。

「でも、どんどん船が増えて来たら、親方一人に任せるのは甘えすぎだと思つんです」

「だなあ」

「それで、何かいい手はないかなと思つたんですけど、何も思いつかないんですね~」

僕は悩むふりをして、親方に尋ねる。

「昔はどうやってたんですか？」

「昔かあ……」

おっしゃあ。

親方に、くじ引きしていった当時を考えさせる事に成功！

あんまりくじ引きを押しても、子供の戯言に取られちやうし、今回はこれでいいよな。

「あ、親方。もう一つお願ひが

「……おう？」

次は何を言い出す気だと警戒されているらしく、親方の返事にはほんの少し間があった。

申し訳ないと思いつつも、僕個人にとつては大事な事なので続ける。

「新しい舟の木材の切り出しに行く前に、叔父達に声を掛けてもらえませんか？」

「うん？」

「確かに叔父達の誰かが山の村の出身で、僕らじゃ分からぬ木材について教えてもらえるかもしれません」

「ああ。確かにまあ」「よろしくお願ひします」

「おう。長い目で見てやらあ」

親方に叔父達の面倒を押し付けしてるのがバレてる……。

でもくじ引きに戻すなら、州長館のお荷物状態の叔父達にも動いてもらわないとマズイ。

大仕事を請け負ってくれる親方を最敬礼で送りだし、僕は甘える事にした。

さらに、色々な人に声を掛けしていくと、びつやうおばあちゃんもこつそり人を呼び寄せては諭してくれているらしく、

「その話、おばあちゃんにも言われてなあ。考えてみたんだが……」
「という事が時々あつた。

話が早いのは助かるし、仕事を始めて数年の若人達に言い出されるよりは、北の賢者であるおばあちゃんからの提案の方が受け入れやすいし説得力もあるに違いない。

少しづつ前に進んでいる実感を得ながら、頑張ろうと自分にエネルギーを送った。

そんな風に働き掛けを行つていてる最中、事件は起きた。

青年の家の7人と、村の子の3人が、夜になつても帰つて来なかつたのだ。

誰も出掛けの姿を見ていないので、どうやら口の出前からそれぞれの家を抜け出したらしい。

てつくり晩御飯まで遊び回つてゐるのだろうと、この時間まで大騒ぎにならなかつたのだ。

大人から子供まで、手が空いている人総出で探し回る事になり……そして魚釣り用の帆船が一艘なくなつてゐる事に気付く。

僕が目を覚ました時には既に晴れていたが、地面には大きな水たまりが残り、まだ緑色をした葉も落ちて、滴がぽたぽた垂れていたのを思い出した。

きつと短時間ながら、突然的な大雨風に見舞われていたの違ない。

そのせいでも子供達の乗った船が、沖へ流されてしまった可能性があつた。

「おー—————い！——聞こえたら、返事をしてくれ—————
————ツツ」

海に向かつて叫んでみても返事はない。

日の出前に抜け出したのなら、もしかすると火種を持っていますらうが、真っ暗な海に灯りは見えなかつた。

魚釣りの時は必ず陸地が見える沿岸で、と教わっている。

海から見た州の様子や、遠くからでも見えるクロワサント島の山脈の形も、海に出る全員が覚えさせられている。

しかし普段釣りに出ている日中の太陽の位置なら、何となく覚えているかも知れないが、夜の星の位置まで分かつていてる子は果たしているだらうか……。

そもそも晩御飯までに帰らなければ、騒ぎになると分かり切つている。

そして騒ぎになれば、秘密どいろか怒られると……。

それなのに帰つて来ないといつ事は、帰れなくなつていてるのだ。

お昼ご飯と水くらいは持つていつたださう。

だが突発的な大雨風で転覆は免れても、何の目印もない大海原で彷徨う事になれば、子供達の命は絶望的だつた。

「僕のせいだつ！ 僕が海に出ていたって言つたからつ！」

物凄い後悔が押し寄せてきて、僕は叫ばずにはいられなかつた。

「お前のせいじゃないつ！ おれ達が言い出したんだつ！」

「やうよつーちゃんを見てなかつた私達が悪いのよつ！」

青年の家を出るまで、一緒に暮らしていた幼馴染の方がいてもたつてもいられないだらう……。

「いいえ。それを言つなら私達」

「そうだ。自分達が忙しいばかりに、子供達だけで行動しても、問題ないと思つてたんだから」

子供を心配する親の方がよつほど辛いに決まつているのに……。

「お前達のせいじゃない」

「おちつけつ。誰が悪いと言つていい場合じやないつ！」

「やうだ。まずは子供達だ」

「大きなかがり火を上げるのはどうかしり。遠くからでも見えるよつこ」

「ああ。いいな。急いで準備だつ」

みんな無事でいてくれ。
祈る事はみな同じだつた……。

抱負。（後書き）

州長館

村長館・州長館・島長館、そつ違いはありません。

実質ちょっと大きめの宿屋。

村の住民以外の人を泊める為に作られたようなもので、昔は村長のくじに当たった村人の普通の民家が館を兼ねてました。

館の住民は村長一家。

基本的に、宿屋部分に、プライベートな空間と、村長室、書類保管室が追加になります。

食事は、村長一家と宿泊客が一緒に取ります。
(希望を出せば、別に取る事も可能)

宿泊客が多い時は、近場の村民が手伝いに来ます。
(役割分担もくじ引きです(笑))

館の目印は、隣に立っている青年の家と、貯蔵物資や共有機材を入れる蔵。

館よりも、両隣の建物の方が大きく目立ちます。

迷子と三枚帆の帆船。

僕は10年前と同様、家を飛び出し港へ向かっていた。

遭難していた子供達が1人も欠ける事無く、帰つて来たのだ。

しかも帆が3枚も張れそうな、遠洋用の大きな帆船に乗つて……！

「全く全く全く～！　あいつら～ツ！」

「全くだ！　心配掛けさせやがつて！」

本当なら港に留まつていたかつただろうに、僕が事務に追われて
いる州長館まで知らせに来てくれた幼馴染と、子供だけで海へ出た
事を思う存分叱つてやると意気込む。

自分が言い出したせいで、子供達は遭難した。

もし子供達が帰つて来なかつたら、例えまた幼馴染や保護者達が
庇つて、許してくれたとしても、とてもじゃないが居た堪れない。

どう償つていいのかも分からぬし、子供達の命は償いきれるも
のではなかつた。

遭難から日が過ぎ、子供達の生存の可能性が低くなるにつれて、
僕は北の州から逃げ出す事ばかりを考え、せめてその前に頼まれ
ている書類だけはしつかり終わらせておこうと、かがり火を灯す寝
ずの番以外では州長館に籠つていたのだ。

事務さえも子供達が遭難した事実から、目を逸らす行為だつた。

だから実際帰つて来た子供達の姿が見えた途端、大急ぎで走ったせいで声は詰まるし、おまけに田から汗まで出て、僕の視界は完全に滲んでいた。

「ハイブお兄ちゃんまで泣いてるよ」

「当たり前だつ！ ほんとに心配したんだぞつ！」

拳骨を喰らわし、しつかり抱きしめる。

良かつた。

10人ちゃんとそろいつている。

揉みくちゃにしてくる親方の腕をすり抜けて、最後にバナが僕に駆け寄つて來た。

「ハイブお兄ちゃんなら褒めてくれるよねつ？ バナ、一生懸命潮と風の流れを読んだんだつ。

ほかの皆はぜ～んぜん駄目なのつ。バナ、頑張つたよつ」

「うん、うんつ。よく、……よくやつたな、バナ！ おかげりつ！」

「えへへ、ただいまつ！」

10人全員を抱きしめて、やつと僕は落ち着いた。

よく見ると帰つてきた子供達は、みんな揉みくちゃにされ、田を白黒している。

元気そうではあるけれど、ちょっと顔色が悪い。

「バナ、お腹すいてないか?」

「すいでる。おじきつ食べたい」

「焼きおにぎり」

「ぼくはおもちがい」

「讐戦だと更にいいよな」

……強者がいる。

当然、皆から一斉にどつきがれていた。

「わづかずの画だし、今日はみんなでいいですか?」

「だな。今日は仕事にならうしない」

親方が乗つてくれた。

「じゃあ、わづかずいいかねえ。一緒に色々持つてきてもいいってんだが」

「おばあちゃん!」

一斉にバナ達がおばあちゃんに駆け寄る。

「うん。元気そうだね。良かつたよ」

「おばあちゃん!」

抱きついてバナ達が大泣きしだした。

「おばあちゃん。お足のほうは?」

「大丈夫だよ、女の子達が連れて来てくれたからね。みんなも元気

「そうだね」

「はいっ」

周りの大人達が、おばあちゃんにくついた子達を引き取りながら、凄く嬉しそうに声を掛ける。

おばあちゃんに面識のない大人達は、周りから聞いて、「北の賢者？」

一斉に驚いた。

だらうなあ。

年配の者は病で臨終くなつてこじるし、おばあちゃんが生きているのは奇跡だ。

「おばあちゃん、椅子」

「ああ。 ありがとう」

「エイブ、すぐに食べれそうな物ぱっかり持つてきたよ～」「気が利くなあ。 ありがとう」

周りを見ると、かがり火から火種を取つて簡単なまどを作り、おもむけやら干物やらを焼き始めていた。

たすがおばあちゃんと青年の家の女性陣。

「おじきつあるつへ..」

「あるわよ～。」(「飯は炊けてるから、急いで握るわね」)

「やつたあつー。」

せつあまで大泣きしていたのに、ケロッとしてバナもおじきつを

握りに行つてしまつた。

「家から何か持つてくれるわ」

「うちも

「鍋とかお皿とかもいるわよね」

みんな一齊に動き出した。

「エイブ、良かつたねえ」

「はい……っ」

僕がおばあちゃんに頭を撫でられ、ちょっとほづとしたまま
ている間に、宴会の準備が終わつてた。

おばあちゃんを中心で円座になつて、子供達から詳しく話を聞いた。

突發的な大雨風に見舞われて流されてしまつたまでは想像通りだ
つたのだが、流れ着いた先がどうやらロウホームスに行く航路の途
中になる小島だつたらしい。

なんと、その小島には真水の水場まであつたそつだから。

子供達はその小島に座礁していた大きな帆船の損傷の具合を見て、
水没しないぐらいまで手を入れて、州都まで乗つて帰つて来る事に
したのだそうな。

幸運と、バナの才能がなければ、とても無事では帰つて来れなか
つたに違ひなかつた。

次の日の朝早く、僕は三枚帆の帆船を見に行つた。

「皆を連れて帰つてくれてありがとう」「帆船に感謝を囁き、眼を閉じしばらくメインマストに抱き着いていた。

「……エイブ、いいか？」

「わあっ。びっくりさせないで下さい、親方っ」

後ろを見ると、親方と数人の大人がそろつっていた。

「すまんすまん。ちょっと話があつてな」

「はい」

しまつた。

どれだけ抱き着いたままだつたんだろう。
恥ずかしすぎる。

「この船の事なんだが」

「どうでしたか？」

「うん、いけそうだ。ただ大分手を入れなきゃいけないみたいだ

「そうですか、お任せします」

「おひ。任せられた」

快諾してくれたけれど、親方の表情が晴れない。

後ろの大人達も顔を見合させて落ち着きがなかつた。

「座りませんか？　話が長くなりそうです」

「分かるか？」

「はい。」この船の管理についてですよね」

「そうだ。お前が常々気にしていた事が、この船で一気に大きな問題になつた」

「はい」

これまで舟は村の共有で、好きな時に使う事が出来た。

だが、この船は特別なのだ。

遠洋にも行く事が可能で、しかも大きさが桁外れ。

誰かの一存で動かすのは危険すぎる。

一気にざわざわとした大人達と円陣を組み、僕らは船の上で時間を開けて相談をした。

僕が20歳の秋。

州都の皆の意見を何とか取りまとめ、北の州は他の州に先駆けて青年の家の状態を元に戻し、更にくじ引き制度再開に漕ぎ付けた。

そして幼馴染の1人に押し付けられたくじを見て、僕は棒立ちし

て固まる。

「あ、あの～もしもし？」

それは、州長のくじ。

それをなぜ自分が押し付けられるのか、サッパリ謎だ。

しかし幼馴染は涼しい顔をして、告げる。

「ハイブに貸しーつって言つたろ?」

「いつの話だよー。覚えてないぞ?」

「ほら～。前に、海図の大判本を探してやつただろ?　その時の貸
しを、今コレで返してもらおつかなー!」

「な……っ」

言われて初めて思い出した、借り。

「つて事で決まりなー。よろしくー。」

「…………。いや、でも。まあいいだろ?」

「15歳からもう5年間もお飾りやつてたんだぞ、僕。更にもう一
〇年は、職権乱用、腐敗の元凶だつてー!」

なかなか理論的な切り返しだと思つたのだが、幼馴染の涼しい顔
は全く崩れなかつた。

「大丈夫だろ、うん」

「…………おいおいおい

「誰も反対しないって

「そうそう

幼馴染達に押し切られ、更に親方にまで睨まれた。
州長を引き受けないと承知せん！ という意味らしい……。

そうして僕は州長を続投する事になってしまったのだった。

迷子と三枚帆の帆船（後書き）

新造帆船

「静かにな」

「おう。ばれてないよな」

「……大丈夫だ」

オレと幼馴染は、体調が悪いのを押して港に来ていた。

オレが設計した三枚帆の帆船が、新航海に出る前に焼き扱われようとしていたからだ。

このまま沈められるのは悔しく、幼馴染と相談して焼き扱われる前に、海に航海に出す事にした。

行く当てのない乗組員のいない航海だが……。

「……手伝おう」

後ろから声を掛けられた。

「親方つ！」

「しつ！ 静かにつ！」

声を掛けられ、ビビった俺達に親方が落ち着けと手振りしてくれる。

「……親方、体調は？」

「お前達と同じだ。だからこそ来た」

「親方……」

「行くぞ」

「はい」

親方が連れて来てくれた先輩達と帆船に乗り込んだ。

「こいつを一の島に連れて行くぞ」

「え?」

オレ等はハモってしまった。

「こいつは絶対残とかなきやならない。これは奴も同じ気持ちだ」

「州長が……」

「帰れない旅になるが着いてくれるか?」

「もちろん覚悟の上です」

「おしふー 出港するつー」

「は二つー」

暗闇の中、静かに帆船は出港した。

他州の人々。

僕が州長を続投した頃から、北の州には他州から人が流れて来る様になつていた。

クロワサント島の現在の全体像が知りたくて、僕は進んで人々の話を聞くようにしていた。

「どこからいらっしゃいましたか？」

「島都……南の州から、だ。」

「病はどうなつてます？ どんな状態ですか？」

「島都にはロウノームスからの使者が逃げて来て、滞在していたせいで、9割近くの住民が死んだ。今は鎮静状態だ」

「ロウノームスの使者は無事に島都に着いたんですね」

「ああ。着いてくれない方が良かつたな」

「そうですね」

ロウノームスの使者達がちゃんと病について報告してくれれば、クロワサント島の被害はここまで広がらなかつたはずなのだ。

「使者達がどうなつたか知りませんか？」
「奴等は皆死んだと聞いた」

「ああ、恨んでるなあ。

僕もロウノームスの使者の対応に思う所あるし、当たり前だよな

あ。

「」飯とお風呂を用意してあります。今日はゆっくり休んでください

「ありがとう。仲間と家族、よろしくお願ひする」「はい」

基本的に逃げてくる人達は家族連れが多かった。
皆一様に疲れ切っている状態だった。

「自分は南西の州からここまで逃げてきたが、聞いたところによる
と7・8割は亡くなつてゐみたいだ」

色々な州から人が流れてきた。
どうやら流行病はここ北の州と、島都の南の州が一番酷かつた様
だ。

それにしても……。

「おかしいよなあ。なぜ北の州はこうなんだ？」

「まったくだ」

他州から流れてきた人々の話を聞いていると、つぶづく感じ
だが、北の州の女性陣は逞しい。

危うくそれを声に出そつとした時、いつから聞いていたのか、思
わず顔を見合せた僕と幼馴染（男）のつぶやきを、しつかり拾つ
た女性陣の声が割つて入つて來た。

「もちろん私達がしつかりしてゐるからよ 」

例えば、後先考えずに走り出すように発案するのが僕だとしたら、そこへ辿り着くまでの段取りや道筋を整えていくのは、大概において女性陣だった。

それに追い立てられるのは男性陣で、そうされる事でやる氣も出たし、散々助けられもして心強いのだが……。

僕といい、幼馴染（男）といい、女性陣には全く頭が上がらない。そんな女性陣を押さえ付けるとは、他の州は何と恐ろしい事を。そして非常に勿体無い事をしているなあと思つ。

「 そうだねえ 」
「 うん。お前達のおかげだ 」
「 当然よー 」

あ〜、やばかった。

離れていく姐御な幼馴染達を見送つて、僕等は冷や汗を拭つた。

北の州と他州の違いは、流行病後の対応の差だらう。

北の州はクロワサント島における流行病の元だったから、ここ最近まで他州から人が流れて来なかつたのも一因かもしれない。

クロワサント島は本来男女同権で、女性は子供を産む存在として大事にされている。

流行病の前はくじ引き次第で、村長・州長・島長を女性が勤める事もあつたくらいに。

しかし流行病を防ぐ為の州境封鎖に始まり、食糧や薬草の統括等は、どうしても力ずくによる対処が多くなる為、自然と現場は男性が指揮権を握るようになつていった。

流行病による世情不安で、荒事に対応したそれぞれの州長もしくは、その州長の血縁者か治安部隊の隊長が権力を持つたのだ。

指揮権＝決定権。

人口が減つてしまつた為、餓死者が出るほどではなかつたが、ここ数年クロワサント島は不作氣味で、流行病全盛期にはその収穫を行う人手がおらず、また収穫物の分配は権力を握つた者の個人的認識で行われ、更なる不公平と格差がもたらされているらしい。

「最初はまだマジだつたんだ」

「ああ。年々酷くなつていつたな」

「お前の所もか」

「ああ。そつちも？」

「だな」

1人が言い出すと、また別の場所から声が上がる。

「今では州長とその周りだけが豊かで、あとは皆喰つに困る者が増えるばかりだ」

「つちもその口だわ」

僕は思わず不思議になり、質問を挟む。

「州長に諫言する事は出来なかつたのですか?」

「最初は居たんだ」

「だが、あまりに病の広がりが酷すぎた」

始まりは、州境の警護や収穫物の保護などの治安維持部隊だったのに、今では州長の権力保持に使われていて、都合の悪い人間は排除されていくらしい。

州長に諫言出来る人が居なくなり、ますます貧富の格差が広がる一方だという。

「どうやって州境を越えて來たんですか?」

さらに問い合わせれば、日々に逃げ出した際の様子を答えてくれた。

「オレは、州境を見張つている人物が情けを掛けてくれた」「お前、誰かに口答えしたのか」

「分かるか?」

「当たり前だ」

「そんな貴方はどうなのよ?」

「なけなしの金をはたいて見張りを懐柔したさ

「同じかつ」

話を聞いていた人達がお互に肩を叩き苦笑いした。
苦笑いだが笑顔が見れた。

良かった。

「州境はまだ閉ざされたままなのですか?」

「自由な行き来は許されていません」

「たまに他州から商人が州長の所に来ているって聞いたわ」

「州境で金を渡すか、州長からの通行許可印を貰っているらしいな」

「あとは、俺達みたいに無断で抜けて来るかだな」

「確かに」

「今度は大笑いになつた。

いい事だ。

僕もつられて笑つてしまつた。

相変わらず州境は閉ざされたままだが、流行病が蔓延していた時のように、見つかったが最期死罪という事はないらしい。

これまでの北の州と同様に、流行病の発生時から、くじ引きはどの州でも行われていない。

くじ引きが行われていたら、ここまで権力の集中は行われなかつたんじゃないかと、話を聞きながら僕は思つ。

色々な話を聞けた僕は頭を下げてお礼を言った。

「他の州の事を話して下さり、ありがとうございました」

「いやなに。こんな話で役に立つただろうか?」

「もちろんです。北の州にはこゝ数年ずっと誰も来なかつたので、島の様子が分からなくて不安になつてゐた所だつたんです」

「こひらに受け入れてもらえてありがたいわ」

「生まれ育つた場所を、故郷を捨ててしまつたという思いは消えやしないが、こちらも聞いてもらえて少しへシとした」

「そういうて貰えると助かります。あと、何か足りない物とかありますか?」

他の州から來た人達には寂れた村の開墾に回つてもらつてゐる。

もちろん食糧や道具などの援助はしつかりした為、大きな不満は出なかつたが、本当なら故郷に留まつていたかつた人達ばかりだ。

「こちらとしては定住大歓迎ですが、北の州の技術を習いに來た、とか、逆に授ける為に來たとか……とりあえずそんな風に考えてみてはどうでしょうか」

「ははは。技術習得希望の移動は20歳までだけどなあ

「裏別名、嫁探しの旅だもんよお」

技術習得希望の移動間に恋愛関係が出来て、そのまま移動先で生活をするもあり。

その相手を自分の生れた村まで連れて帰るもりなので、そんな風に呼ばれているのだろう。

「 もうこ、や、お若いの。州長らしいが、嫁はいるのか？」

「うう」

「ううキタか.....。

喉を詰まらせた僕を、嫁じころか、お嫁に来てくれそうな恋人もおらず、婿に迎えてくれそうな女性もいないと見抜いたらしい人々が表情を和ませた。

「まあ、がんばれや～」

「はい」

ちよつと半泣きになつたが、とりあえず頷いておいた。

州長の嫁つて雑用係に来てくれる子いるのかなあ。

10年州長辞められないし。

ホント切実です.....。

他州の人々。（後書き）

手紙

拝啓

父上、母上、お元気ですか。
自分は元氣にやつてます。

急な話なんですが、今度結婚することになりました。

相手は、たまに手紙に書いてたあの子です。

（分かるでしょうか？（笑））

5年前、製陶技術を学びたくてここまで来た自分が、こちらに来る前に『嫁さん連れて帰つてこよ』といつ励ましを、そのまま実行する事にならうとは全く思つていませんでした。

裏別名、恐るべしです……。

今度一緒にこちらに帰ります。

皆に会つのも久しぶりだなあ。
今から本当に楽しみだ。

あーでも大騒ぎにほしないで下せこよー、恥ずかしいですか
ひつー

では、また近田中。

敬具

P.S. 姉ちゃんには絶対に言わないで下をこよー。姉ちゃんにバレたら絶対お祭り騒ぎに巻き込まれる~。頼みます~。

「もう見つかりしねのこなげ」

「ホントホント」

「……」

「楽しみねえ」

「ホントに~」

座談会。

逃げてきた人達から他州の話を聞いた僕達は、おばあちゃんに愚痴りに来た。

「どう考えたっておかしい。人口は減ってるのに食べられない人が出るなんて」

「そうだねえ」

「皆で生産して平等に分ければ絶対平氣なはずなのにつ」

「だなあ」

「お腹一杯食べられないのは辛いものねえ」

「まったくだ」

「うんうん」

そのまま晩御飯に入し、青年の家の間にまで愚痴つていた……。

「だがエイブ、クロワサント島は昔から村」との血治が決まりだからねえ

「そうですねえ」

一見的にちゃんと治まっている他州に手を出す事は出来ない。

北の州に逃げてくる人は居るが少数だし、大多数の人達は平和に暮らしているからだ。

でもその平和は抑え付けられているからそう見えると「だけ」で、

しかも権力を握っている一部の人々以外は飢えている。

「え？ 援助物資を勝手に流す事は出来ないのか？」

「そりなんだよ。下手すりや村自治への干渉って事で」うちが非難されるんだ」

「お腹がすいてる人に対しての炊き出しもダメなの？」

「基本的に炊き出しほ、その村の村長が首頭を取りてやるものなんだよ」

僕はむ～っと呻る。

「変なの～」

「その為の蔵物資だからなあ」

「なるほど～」

頷きもするが、また新たな疑問が沸いた。

「あれ？ ジヤあの村長が本当に変で、村民に助けが必要つて時はどうするの？」

「その時は州長だね」

「州長が駄目な時は？」

「島長になる。争い事の最終判断も島長がするんだよ」

「へえ～」

基本的には良く作つてある決まりなんだよな。

ちゃんと動いてればって所が、今回はネックになつてゐるけど。

でも、どうにかして援助物資を送れないかな。

お腹一杯食べられない日々が続くのは、どう考えたってキツイ。

「他の州もとりあえず喰うに困る状況からは抜け出させたいよなあ……」

「やつぱりー そろそろ何かやらかしたいって言ひ出すと思つたんだつ」

「えへっ。あたしはエイブがまたきなり全島でくじ引き再開つて、唱えると思つてた。ちょっと予想と違つたなあ」

「ホントだよー。そしたらタコ殴りに出来たのにー」「学習能力ないのつ！ て、ねえ」

「……」

「ひニツ、……言わないで良かつた。
絶対ホントにタコ殴りされてるつ！」

「ひらひら、お前達」

「はへーいつ」

「これだからエイブは……男共は……という話にまで発展しそうになつたところで、おばあちゃんが止めに入つてくれた。

うへへへ。

相変わらずグサグサと、胸に刺さる事を言つてくれるよなあ。
ホントの事だから、反論出来ないけどわあ。

おばあちゃんしか女性陣を止められないし、居なかつたらと思つ
と恐ひしい。

もう青年の家に足を向けて眠れません！

そんな僕に、男性陣からは憐みの視線が寄せられている。
さりには、肩まで叩かれた。

同情してくれるなら、止めてくれよ……。

僕でも女性陣の勢いを止めるのは、無理だと思つけども。
むしろ何倍返しを食らうのがオチだと、震えが走る。

ともあれ最終的には全島くじ引きに持つて行きたいと僕が思つて
いる事を、絶対一言も言つてないはずなのに、既に女性陣は見抜いて
いるらしい。

女つて凄い……。

「でもさHイブ、簡単に言つけど、北の州だけで全島分の援助物資
なんて無理だぞ」

「うーん、それは分かつてゐる」

北の州もだいぶ落ち着いては来たが、まだ復興途中なのだ。
自分達の活力の元である食糧まで他人に分ける余裕はない。

あくまで我が身第一なのだ。

僕は父のように命までは懸けられない。

「それに他州の州長を通したんじや、そのまま着服されて本末転倒

……なんて事になるだろ？」「

「そうだよなあ」

「えへっと、つまり、ビニから・どれだけ・どうやってが問題なのか？」

「誰に。も問題だと思つぞ」

「「う～～～～ん」」

打つて変わつて、みんな真剣に考え始めた。

食えない人を助けたいのは皆も同じなんだなあ。

でもすぐに出来るもんでもないし、自分達も一杯一杯の日々を送つていてるのに。

ホントにいい奴等だよなあ。

「逃げて来た人達が頑張つて開墾してくれてるおかげで、今年の収穫量は上がると思う」

「うん。これまで州長館で暴利を貪つてた人も、心を入れ替えたみたいだし、その分も浮くかなあ」

「ハイ。その節は叔父叔母を止められなくて、スミマセンでした」

ついに訪れた良い機会だったので、口調だけは茶化しつつ速攻僕は手を付いて謝った。

「いえいえ」

「はいはい」

それに対する幼馴染達の返事も実に御座なりだつたが……。
でもそれで充分だ、お互いに。

「とりあえずその少し余裕が出来る分を、他州に持つて行くのはどうかな？」

「ほらあ、ハイブ。メモメモつー！」

「……また僕?」

「「当然」」

思いつきり不本意を態度で示したのだが、一斉に頷かれて僕の気
分は途端にブルーだ。

僕つてお飾りじゃなくなつてゐはずなのに、州長つてこんなもの
なのか?

流行病前の父はどんな風だつたつけ?

内心ぶつぶつ零しながら、それでもしつかり文字に起こしてしま
う僕つて頑張つてるよなあ……。

「佃煮や干物なら日持ちするから、他州に回すのもいいかも」

「それ貰つたつ。海の生き物を食べても大丈夫だつて、まだ知らな
い村があるかもだし?」

援助物資をどこから手面するかの日途は尽き、話題が変わる。

「離れてる州にまで運ぶのは大変そうだ」
「輸送方法も考えなきゃな」

「他州も舟を直してゐるかな？」

「海で他州の舟は見た事がないぞ」

「今度、逃げて來た人達に聞いてみよつ」

「ああ。いいね」

陸路で馬車の輸送よつ、先に舟が浮かぶなんて。
クロワサンント島が島である以上、やはり海とは切つても切れない
関係なのだと改めて思つ。

「その時に信用出来る人も紹介してもうらえるといいね
「そうだよねえ」

「州境は前より厳しくないみたいだし、連絡さえ取れれば、食糧は
渡せそうだもん」

ふと気が付けば、おばあちゃんが感心したよつに何度も頷いてい
る。

「おばあちゃん……？」

「みんなしつかりこの10年の経験を生かせてゐるねえ。やうやく
おばあちゃんの知恵袋も必要なくなりやうで、嬉しいよ」

「なつー、おばあちゃんはずーっとずーっと必要ですか？
寝つきになつても、口がきけなくなつてもですつ」

僕にとつて、おばあちゃんはその存在自体が癒しなのだ。

別に幼馴染の暴走だつて止められなくなつたつて、居てさえくれ

れば構わない。

ただ褒めて貰えるだけで本当に嬉しい。

おばあちゃんが居るというだけで落ち着けるのだ。

おばあちゃんの口調はあくまで穏やかだったが、何だかすぐにでもいなくなってしまいそうな気がして、僕は立ち上がり駆け寄り、その手をぎゅっと握った。

座談会（後書き）

クロワサント島の輸送

島の東西に山脈がある為、大量輸送をする場合は舟を使う事がほとんどです。

まず海路で目的地に一番近い港まで運びこみ、そこから川船に移し替え川を遡る。

ただクロワサント島の川は、山から駆け下りてくる急流が多く、川船を遡らせるために河岸から川上に引っ張つていく方法が良く取られました。

川がない地域への輸送は、馬車・牛車・驢馬車などに移し替え、陸路を移動します。

流行病の流行前は、青年の家の技術習得の為の移動による結婚などから、州間の移動も多く物流も盛んでしたが、

流行防止の為に州境が閉ざされた事により、物流が途絶え、工イブが他州への援助を希望し始めた時には、人が通らない為に陸路はどんどん消え、残つても獸道に近い状態になっています。

抜け道と前契約。

「じゃあ、この道なら通れそうですか？」

「ああ。確か俺達はこの道を通ってきたはずだ」

クロワサント島の地図を覗き込み、僕らは話し合ひを続けた。

まず陸路での輸送が消えた。

他州から来た人達からの情報で、この10年、人がほとんど通りなくなつた為に道が消えていたのだ。

残つている道も獸道に近いらしい。

獸道では馬車を仕立てる事も出来ない。

食糧は嵩張るし重い。

人力のみでは輸送は厳しい。

「そうなると、輸送は船だな」

「でもそうすると……」

「港だな」

話し合ひを続ける中、さらに別の問題が出た。

「うん。港の現状はどうなつてますか？」

「州都以外の港は、ほぼ使われてないと思つ

「まず人が居ないしな」

「でも州都の港はダメよ。見張りが多すぎるので

「 「 「 「 「 「 「 「

州都以外の港の現状が分からないとなると、座礁しない様に舟を動かすには、船頭の腕だけが頼りになる。

だが実際の所、北の州もやつと数年前に舟を扱い出した所だ。皆そこまで操船に熟練していないので。

そうなると、思い当たるのは……。

「バナに頼むしかないか」

「ああ。だがバナに頼むとなると、ちゃんと話は詰めとかないとまずいぞ」

帆船の船長＝舵を取る人＝航海の指揮者＝バナ　という図式が頭に浮かぶ。

「うん。一度向こうの人にはつて、ちゃんとお願いするしかないな」

自然の流れで僕は口に出したのだが、なぜか幼馴染達からストップが入った。

「おい！　ハイブが行くのか？！」

「当然っ！」

「うがあ！」

「何考えてんだバカっ！　お前州長だろ？　があー！」

「俺らが行くっ！」

そして一斉に、幼馴染達が僕の頭を押さえ付けてくる。

う、動けない……。

「何でだよ～。お願いするなら、州長の僕が動いた方がいいだろ～」

押さえ付けられながらも、僕は言つただが……。

「アホかっ！」

「お前が動いて何かあつたら、北の州はどうなるんだよつー！」

「え～。親方達もいるし。北の州は落ち着いてるし、大丈夫だろ～」「何かあつたら……なんて事を考えたらキリがないし、実際に僕の代わりなんていぐらでもいると思つ。なのに～なのに～。

「もう喋るなつ

「案内お願いできますか？」

「ああ。任せてくれ

僕の頭の上で、話がどんどん纏まつていぐ。

「じゃあ、南西の州は」

「おう。オレが案内する

「北東の州は？」

「おれだ。みろしく頼む

どうやら島都がある南の州以外の、8州に物資を送る事に決まり

そうだ。

島都がある南の州へ下手に手を出すのは、時期尚早だらうといつ

判断から8州になった。

「大勢で行くと、見張りに見つかる可能性が高くなるんじゃない？」
「州境を越えるんだ。少人数で行くしかないな」

「じゃあ、コメの収穫までに戻つてこなきやだし、8組送つてそれ
ぞれ話を決める方が早くていいんじゃない？」

「いいね。各州にはそれぞれ案内役とボク等の一人でじつっ！」

「まあ、途中までは一緒に行けるだろ。それぞれの州に近くなった
ら分かれて行けばいい」

「いいですね。じゃあどこの州に行くか、ひとつも決めときます
「分かつた」

ちくしょー押さえ付けられてる間に、どんどん話が決まっていく
」。

釣り舟の時と一緒にだよ。
また仲間外れかよ～つ。

「エイブ、次行くぞ」

「お前が北の州にいるから、俺達は自由に動けるんだ」

「そうそう。しつかり州長よろしくね」

「うわーーー

やつと頭の上の重しをかけてくれた。

恨めしそうに幼馴染達を睨んでやつたが、相手は笑つて返しやが
る……。

「うそっ！ いつか絶対出かけてやるーーー！」

いやいや、落ち着け僕。

このままだと今日の話しあいから絶対追い出される。

深く深呼吸し、次に話し合わなければならぬ事に頭を切り替えた。

「相手の誰ではありますか？」

「ああ。ある」

「それは任せといてくれ。絶対変なのは紹介しない」

「はい。お任せします。あと援助物資ですが、貴方達が収穫した物を貰ひよつと思つてます」

「おれ達の？！」

「ええ。貴方達の」

一斉にざわつきが起じた。

「北の州の者の中には、自分達にゆとりがある訳じゃないのに、援助物資を出すのはおかしいと考える者もいます」

「おい、エイブ」

確かに本当の事だが、なぜそれをわざわざ言つ必要があるんだと幼馴染達は訝る。

それに対し、安心させるよつて微笑んで、僕は続けた。

「でも、貴方達は違う。貴方達にとって、他州の人達は仲間です。仲間にに対する援助なら納得出来るし、それぞれの州長も田ぐじらは立てられません」

そりにさわめきが増えたが、無視して先に進めた。

「もちろん北の州の皆からの合意済みですが、」さむらも無断で援助物資は送れないんです。

なので今回は皆さんからの援助物資という事で、輸送費のみを支払いして頂く形になります」

「村自治か」

「うん。そう。ちょっとした抜け道だね

「考えたなあ」

北の州として援助をしたくない人もやはりいたので、その点も配慮した結果である。

ホントに考えたよ~。

考えすぎて頭の中がしばらく動かなかつたぐらいだ。

「え？ 干物とかは今回なし？」

「干物は今回僕ら輸送は初めてだから、初めての契約者に対するオマケだね」

「オマケ！」

「それイイつ！」

一斉に場が沸いた。

「輸送費の代金は出来た時にお支払頂くといつ事で、僕等は皆さんは希望先に物資を運ぶ。受け取った皆さんは州都まで運び、闇市場を開いて物資を捌く。

という感じでどうでしょうか?」

僕は持ってきた流行病前の輸送に関する書類を見せ、さうに作ってきただ書類をそれぞれに渡した。

「いいんじゃないか?」

「うん。ありがたいぐらーいだ」

どうやら8等分した輸送費の請求書についても、避難して来た皆さん納得してくれたらしい。

「あれ? これ物資を渡した後はどうなるんだ?」

ああ、気づかれたか。

「そこから先は、それぞれの州の皆さんにお任せします」

また一斉にざわめきが起じた。

「タダで配るのも良いとは思つんですが、輸送費の支払いがありま
すからね。

こちらの輸送費分と、州都までの輸送を頼む分。
あと保管についても考えて、良心的なお値段にして貰えると嬉しいです」

「いらっしゃりで値段設定できるのか?」

「ええ。皆さんがの方が他州については詳しいですから。いらっしゃりでな

ら購入出来るか、その辺はそちらで相談して下さい」

書類を見直して値段についての相談が始まった。

「なあ、引き渡しなんだけど、間違った人に物資を渡すとまずくな
いか?」
「バナだしねえ。ちゃんと決めといた方が良いって」

「うんうん」

「……」

「お~い、バナ~。」

お転婆でおっちょこちょいなのは知つてたけど、青年の家の兄姉
にここまで信用ないのはまずいんじゃないかな?

つい胸の中で突っ込んじゃつたが、今回はバナよりも、間違いを
出さない方が重要だ。

8州それぞの担当になつた人達が船に乗り込む予定なので、バ
ナだけが物資を引き取りに来た人達と相対すると決まつたわけでは
ない。

しかし港の現状が分かるまで、海の状態を知る才能を持つバナは
毎回参加する事になるだろう。

「どうする?」「うん」

すぐにはいいアイデアが浮かばなくて、つい腕組みして悩んでいると幼馴染の1人が、

「あれはどう?」

壁に掛かっている鍋敷を指さして言って来た。

「鍋敷?」

「うん。あんな感じで模様を木彫りして、半分に割つて、絵が合つたら引き渡しをする」

「きれいだし、いいわね」

「きれいな物はバナも好きだし、早々無くさないだろ」

「「だな」「
決まりだ。」

「8つ任せたつ」

「「任せたつ」「

「おれつ?！」

木工仕事が得意なダーヤルに押し付けて、

「や～無事に決まって良かつたね～」

「「うんうん」「

「ちょっと待て～つ」

1人涙目なダーヤルを置いて、僕は幼馴染達とほのぼの笑った。

> .
1
3
4
7
9
6
—
4
2
7
9
<

抜け道と前契約。（後書き）

本契約

「じゃあ、これで決まりという事で」

「よろしく頼む」

しつかり握手をぼく達はした。

「ここまで来るのが、まず大変だった。」

なんでこんなに道が寂れてるんだよおおおおおおお…！」

疲れてなかつたら、絶対大声で叫んでたつ…！」

村で親方達から、

「エッグ。お前達にばかり実行部隊を頼んでしまってスマン。だがお前達が動かなければ、エイブが動くだろ？ 今エイブを北の州は失う訳にはいかないんだ」

真剣にぼくを見つめ頼まれちゃった手前、途中で絶対へばれなかつたしな……。

それに親方の言つ事はどうもよく分かつた。

最初にエイブがくじ引きを言い出した時に、皆で一蹴したが、今では他の誰でもないエイブが先頭に立っているからこそ、ぼく達はこうして意見を交し合い、実際に動けているのだ。

「物資はコメの収穫が終わってから此方に持つて来る事になります」

「頼むっ」

「……あと、これなんですか」

「ぼくは胸元から木彫りのペンダントヘッドが付いた首飾りを引き出した。」

「どうあえず、こいつは終わらせた。後は寝てからやるつー。」

ぼく等に一個ずつ押し付けるとぶつ倒れた、三晩完徹の超特急仕事をしたダニヤルの力作である。

ちょっとしみじみ見てから手渡した。

「これが物資の引換替わりです。物資受け取りの時には持つて来て下さい」

「引換ですか?」

「はい。これがないと物資を渡せませんので必ず持つて来て下さい」

「分かりました」

「ぼくがこの州の担当になっています。今だけじゃなく、平和なつてからも末永くお付き合い頂けると嬉しいです」

エイブだつたら絶対言つてるだろう事を付け加え、契約書を持つ

てぼくは意氣揚々と北の州に帰つた。

出航。

今日の北の州はちよつと違つ。
早朝から皆して浮き足立つてゐる。

三枚帆の帆船“輝ける白”が、とりとつ本格的に遠距離航海に出るのだ。

他州への援助物資の輸送を船ですると決めたその時から、使う船は援助物資の量からして“輝ける白”しかありえなかつた。

親方には無理を言って、修理を急ピッチで進めてもらい、進水式もそこそこに僕等は練習航海に出港した。

なのに……船酔いした。

こんなに船が好きなのに、何でだよおおおおおー！

まあ、僕だけじゃなかつたのは救いだつたが、沖に出た途端に吐き気が込み上げ、役に立つ所か、皆に迷惑かけまくつてしまつた。情けない……。

これは、航海乗員を慎重に決める必要があると、まず船酔いする僕と、同じく船酔いをする仲間がメンバーから外された。

さうに州民から出た乗船希望者の「ひ、身軽な者と青年の家のメンバーで、何度も練習航海を行い、その中でも特に海に強そうな年長者をベースに、今回の航海乗員は決定された。

もつともバナと、相手側の顔確認の為、8州の代表者と契約を交わした幼馴染達は強制乗船だ。

「いいな。危なかつたら無理はせず帰つてくるんだぞ」「行かなくてもいいのよ。陸から皆で運ぶつて手もあるんだからね」

航海乗員の中で最年少のが、バナ。

その最年少が一番重要な舵取りをするんだから、北の州の人達は、もう皆が心配した。

バナの才能は、北の州の皆が認める所だが、今回の航海にどうしてもバナが必要だった訳じやない。

だが、成功率を高める為にはバナが舵取るのが最適だった。

まあ、強制乗船の幼馴染達ならバナの補佐として最強メンバーだし、周りの皆もきっとバナを盛り立ててくれる。

不意の事故があつても航海乗員の皆なら大丈夫だろう。

でも大海原を航海かあ。
気持ち良さそうだよなあ。
船酔い体質が恨めしい……。

今回の航海乗員の中には、無理矢理に自分の乗船を認めさせた猛者がいる。

「お前等が超ぶつつけ作業させた首飾りが、ちゃんと合ひつか気になつて眠れないんだつ！　おれも連れて行け～つ！」

ダニーヤルが名乗りを上げたのだ。

「ダニーヤルも僕と一緒に船酔い体质だろ？　大丈夫？」

「ヤバくなつたら“輝ける白”に木彫りして心頭滅却し、船酔いをブツ飛ばすっ！」

「練習航海中もそれで乗り切つたのか？」

所々に模様が増えている“輝ける白”を見回して僕は尋ねた。

「当たり前だ！　それに木彫り模様が合わなかつた時に本物かどうか分かるのは、おれぐらいだろ？　修正もしたいから、どうしても行きたい」

確かに彫つた本人なら確認出来る。

先に他州に渡す分だけ彫つて、残りを後から彫つてたし、ちゃんと模様が合うか気になる所だけど、好きな作業で精神統一し、船酔いをぶつ飛ばしちゃうのは凄いよなあ。

「超タイムトライアル作業を押し付けたのは、ぼく等だしね。ダニーヤルは練習航海でも船酔いをホントにぶつ飛ばしてたから大丈夫だよ」

どうやらHUGOが面倒を見てくれるらしい。

「まあダメでも命綱着けて海に放り投げれば、ダニヤルの田も覚めるでしょう」

「「わすがフイシャリ」」

「どういつ意味よ」

「「わすがフイシャリ」」

睨まないで下さい。

青年の家出身の姐御達の中でも、一本筋が入っている貴女への贊辞です。

フイシャリが居てくれれば“輝ける白”は安泰だ。

ホントに航海乗員はバッチリ。

後は何事もなく無事に帰つて来て欲しい。

「エイブお兄ちゃん、荷物積み終わった～」
バナが僕の所に報告に来た。

とうとう出港だ。

今回の航海乗員以外はすべて“輝ける白”から降船し、残るは今回のみ。

何故か僕の所に集まってきた乗員達と顔を合わせ、僕は右手の甲を上にして差し出した。

ババババツとその上に手が乗っていく。

最後に左手を一番上に乗せた。

「長い船旅になる。安全第一で行ってくれ」

ପ୍ରକାଶକ ନାମ

僕は、ギュッと上から押さえ付けられた手を下から跳ね上げ、エールを送る。

卷之三

「一ノ瀬」

一斉に皆がそれその担当場所に散っていく。

“輝ける白” 皆を頼む。

メインマストを撫でてから、僕は後ろ髪を引かれるが振り向かず
に地上へと戻る。

卷之三

親方が戻った僕の肩に、手を置いてくれた。

「はい。エッド達もそれぞれの州からの帰り道は覚えたつて言つてくれました」

「なら安心だな
「はい」

沖へと進んでいく“輝ける日”を、その場からしばらく動けず僕は追い続けた。

「エイブ、いい加減信用してやつなさい」

珍しく青年の家からおばあちゃんが出て来て、僕に声を掛けてくれた。

“輝ける白”が気になつて、ここ数日上の空で仕事をしている僕を見かねたらしく。

「やつは云ひけど、おばあちゃん」

「エイブ、お前の仕事は？」

「……北の州の州長」

「そうだ。お前の仕事は、出掛けている者がちゃんと帰つてくれる場所を残す事。今の日常を継続する事だよ」

「だけど」

「エイブは、仕事を任せられた筈なのに、任してくれた相手に心配されてばかりいるのは嬉しいかい？」

おばあちゃんの指摘に、ハツとした。

そうだ、僕は皆なら大丈夫だと思つたからこそ任せた筈だ。

「……嬉しいない」

「分かったようだね。気張りビコリだ。頑張るんだよ

「はい

久しぶりに僕の頭を撫でてくれるおばあちゃんの手、青年の家から会いに来てくれる程、僕は心配掛けてしまったんだと気が付いた。

「ありがとう。おばあちゃん」

もうしじばりく頭を撫で続けて欲しくて、僕はおばあちゃんに頭を下げる。

出航（後書き）

伝令

「伯父さん、お久しぶりです」

「元気そうだな」

「はい」

久しぶりに会った伯父に会釈し、集まってくれた皆にも頭を下げる。

「北からのお言を持つてきました
場の緊張が一気に高まった」

今回の話にどれだけ皆の期待が大きいか、ビシビシ伝わってくる。
「物資の荷造りはもうすぐ終わり、間もなく船を出せるやつです」

伯父は肩を叩いてくるし、周囲も皆、腕を叩き合って、握手し、涙を浮かべる者までいる。

だが、声は出せない。

北の州との違いをつくづく感じる。

いたな時、北の州なら口笛笛笛お離子万歳三唱のお祭り騒ぎだ。

北の州長が若いから? いや! がそれだけ抑圧されていくんだ

れい。

あ、伝言想い出した。

「伯父さん、もう一つ北の州長から伝言を預かってました」「何だ?」

一斉に皆がこちらを見た。
ちょっと恥ずかしいんだが……。

「落ち着いたら、こちらに技術取得の希望者を送りたいそいつです。お願いしたいと言つておられました」

「裏別名、嫁探しの旅か」「久しぶりに聞いたなあ」

懐かしそうに、皆がざわざわ語り出した。

「嫁探しでなら、一番に北の州長が来そつですけどね」「そうなのか?..」

「ええ。北の州で一番嫁取り出来なそつなのが、州長ですか?」

本人を思い出しつゝ吹き出しそつになってしまつ。

もつと聞きたそうな皆さんに、北の州長とその幼馴染達のHピソードを、その夜知つてゐる限り延々と語りてしまつた。

州長には悪いけど、楽しかつたあ。

「エイブお兄ちゃん、ただいま～っ！」

「バナっ！ おかえり～、上手くいった？」

日常だ、日常を継続するんだと、“輝ける白”が帰ってきた事に気が付いたが、そのまま窓の外に気を取られながら、州長館で仕事を継続していた僕。

そんな僕の前に、バナが飛び込んで来てくれた。

「うんっ！ バナ、頑張ったんだよっ。……え～っとね、こんな感じだった～」

そう言つとバナは数役こなしながら、エイブに状況説明をし始めた……。

* * * BGM・スペイ音楽っぽいの

静かな夜の海。

潮や風を読みつつ遙々北の州からやって来て、前もって取引場所と決めた港にあと少しで着くという夜、“輝ける白”的上から陸を見ていたバナは、陸からのランプの光に気付き、フィシャリ姉に目配せした。

「ええ。合図ね」

領いたフィシャリ姉は、足元に置いていたランプを持ち上げ、ランプの光を布で隠したり取り扱つたりをゆっくりと何度も繰り返した。

すると向こうも決められた通りに返してきた。

「間違いない、物資の取引相手だ」

北西の州担当のガーンディ兄も、バナに領いて来た。バナが周りを見回すと、仲間は皆領いてくる。

「よし、明日は“輝ける白”を港に着けよう。くれぐれも気をつけろよ、バナ」

「ええ、分かっているわ

自分の役目は、今夜はゆっくり休み、明日の入港に備える事。後の事は夜勤の者に任せ、バナは寝床に入った。

翌朝、“輝ける白”はゆっくりとバナの読み通りに入港した。

「お久しぶりです」

「来てくれてありがとうございます」

「約束は守りますよ」

ガーンディ兄が、相手の人としつかり握手を交わしている。

しかし顔を合わせても、すぐに物資は渡さない。

ランプの合図以外にも、取引相手の確認手順があるので……バナは問い合わせる。

「例のものは？」

「……ここに」

ガーンディ兄と握手していた人が、木彫りの首飾りを出して来た。

「貸してくれっ」

ダニヤル兄が引つたくり、手元にある8つの舟形の木彫りから一つを取り出し型を合わせる。

それはぴったりと綺麗に嵌った。

「確かに……。合言葉を」

バナが言った途端、相手は狼狽する。

「そ、そんなの決めていたかっ？」

それを見て、バナはふつと笑った。

「嘘よ。でも、そんなに固くしてて大丈夫なの？ これつきりの取引じゃないわ、まだまだ先は長いの。 気楽にいきましょう、お互いにね」

「……はあ」

「ではこちらの物資を収めて頂戴」

バナは帆船に積んであった荷を見せた……。

バナの語りがここまで進んだ所で、バナの後から続々入り、一緒に話を聞いていた幼馴染達が吹き出した。

「ぶははははっ。もう我慢出来ねえっつ。そんな言い方してないし！　バナなんか、めちゃくちゃ緊張してたじやん！」

「も～～雰囲気壊さないでよ～～っ！　ガーンディ兄だつて、カチコチだつたでしょっ！」

それを聞いてバナは怒っているが、僕も笑う。

「通りで芝居がかつてると思つたつ」

「こんな風に報告された方が、エイブお兄ちゃんも楽しいよねっ？　うん。何かもうすっかり気分は闇取引！？」

実際、権力を握っている人達にすれば、それ以上の何物でもないのだが……。

「バナ、渡し相手の確認に使つた鍋敷きほしいな～。ホントに綺麗だつたんだよ～」

「うん。あれは綺麗だつたわ。私も欲しいなあ」

おや、フィシャリからの褒め言葉が出た。
これは凄い。

「お部屋に飾りたいよねつ」

「いいわねつ」

実際に实物を見れなかつた僕は、レプリカを作つて貰う事にした。

「（）褒美でダニヤルに作つてもらうといよ」

「おいつ！？」

「（）褒美つ！？ やつたゞつ」

ダニヤルは渋るが、バナはもう氣満々である。

「でもダニヤル兄つてば、そのままでもバッチリ合つてたのに、州の人人が首飾りを出したら、引つたくつてさ。さつそく手直し入れるんだよ」

「あれはちょっと邪魔だつたわ～
「荷物運びの手伝いも無視だつたね～」

「スミマセン（）テシタ。オワビに2人に鍋敷きを進呈シマス」

「やつたあつ」

「悪いわねえダニヤル」

「イイエ、ヨロコン（）テ」

弱り切つたダニヤルの顔が可笑しくて、つい大爆笑してしまつた。

周りの幼馴染達も、ダニヤルの肩や背を叩いて大笑いだ。

うん！ 今回の航海は大成功！
僕はホッと一息ついた。

後でそれぞれの州に確認に行つた幼馴染によると、 詳細はそれぞれ違うが、 援助物資は無事に南の州を除く各州で開かれた闇市場で売りに出されたそうだ。

次が楽しみになってきたつ！

帰航。 (後書き)

取引

静かな夜の海

潮や風を読みつつ遙々北の州からやって来て、前もって取引場所と決めた港にあと少しで着くという夜、バナと皆はもう興奮しまくっていた。

「見えるか？」

「あれっ！ あれ違う？！」

「？」

みんな一斉に駆け寄つてくる中、バナは陸からのランプの光に興奮し、フィシャリ姉に飛びついた。

「ええ。合図ねつ」

頷いたフィシャリ姉は、足元に置いていたランプを持ち上げ、ランプの光を布で隠したり取り払ったりを、震える手でゅつくりと何度も繰り返した。

すると向こういつも決められた通りに返してきた。

「間違いない、物資の取引相手だつた」

「ウタカタ」

北西の州担当のガーンディ兄は、バナと一緒に周りの仲間に抱き着かれて押し倒された。

明田は“輝ける白”を港に着けるぞ

八、地圖

船上はもう祭り騒ぎだ。

皆で飛んだり跳ねたり、海に飛び込んだりしまくったつ！

「野郎どもつ！ 夜勤の者以外全員就寝つ！」

はし「如徳」

フィシャリの号令の元、バナは寝床に入つた。

翌朝、“輝ける白”はあつちこりつちにヨロヨロしたが、バナの読み通りに入港した。

「お久しぶりです」

「約束は守りますよ」

ガーンディ兄が、相手の人としつかり握手を交わしている。

その後ろの船の上から万歳三唱を行い、口笛、指笛出来るお囃子を飛ばしまくった。

そんな中、目の色変えてたのがダニヤル兄だ。

「例のものは？」

「……ここに」

ガーンディ兄と握手していた人が木彫りの首飾りを出して來た。

「貸してくれつ」

ダニヤル兄が引つたくり、手元にある8つの舟形の木彫りから一つを取り出し型を合わせ、ぴったりと綺麗に嵌つたのに、さっそく座り込んで手直ししてゐる……。

そんなダニヤル兄に、北西の州の人は引いていたが、浮かれたバナはついふざけて、

「合言葉は？」

「そ、そんなの決めていたかつ？」

「山といえば？」

「川だつ！」

何だか可笑しくて笑っちゃつた。

皆もつられて大笑いしてくれた。

「ではこちらの物資を渡すわね」

フィシャリ姉の号令に、慌てて荷物運びに皆で走つた……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6494x/>

白く輝く帆の下で　－北の州長の奮闘記－

2011年11月20日07時12分発行